

救いとは

甲「お子様をお失いなさったそうですね……私も三つになった哲子を失いました時、熱湯を飲むような苦悩を味わってきましたから、あなた方ご夫婦のお心持はわかる気がいたします。これほど深刻な苦患はないと存じます。」

乙「先生、たった一人の子ですもの、私どもの生涯はこれで終ったような気がいたします。それ以来家庭は永遠の闇に変わってゆきました。主人が今日お役所に出ましたあと、そつとその日誌を見ませば、もう亡くなつて一年もたちますのに、生きる望みも活動する意気も失せたと言ひ、夫婦生活すら呪わしくなつてきたと申してあります。時には、二人でにぎやかになろうと思つてお芝居に行つたり、遠足に出かけたりしましたが、やはりだめでございます。主人の顔はだんだんあおぎめて、今ごろは食事すらうんと減つてきました。夜も眠られない日がつづきます。こうして私ども二人はこの世ながらの闇に日に日に沈んでゆくのが、はつきりとわかります。私はあの子が返つて来ない以上、神や仏もあるものかという心さえいたします。」

甲「失礼ですが、泣いていなさるあなたのお顔はまるで亡霊のようです。お二方とも教育のあるお方です。それが今のようにみじめなまで暗くなつて、低級な祈祷やト占吉凶にまで去ろうとなさるのをご同情いたすとともに、もつと信念の上にも生活が転廻されるようにと念ぜずにはいられます。人は苦悩に陥つた時は運命論者になります。それが魂の死んでいる証拠です。勢のいい時はみんな自分の力だと過信し、悲境に立つとあられもない迷い方をはじめます。」

乙「明るくなりたいのです。でも子どもは返つては来ませぬ。」

甲「どんなにしても灰になつたものが返つては来られないことに徹底なさいませ。釈尊は子どもを失つて泣いている人に申されました。『子どもを返してあげよう。』と。すると、その女は飛び上つてよろこびました。しかし釈尊は『けれどもそれには一つの条件がある。どこかに人一人も死んだことのない家を探して来るがよい、そうしたら子どもを返してやる。』と。女はよろこんで家から家を訪ねましたが、どの家に行つても、子どもが死んだ、親が死んだ、妻が、夫が、祖父が祖母が……ついに一人も死んだことのない家を見出すことはできなかつたので、がっかりして帰つて来ました。釈尊はその時はじめて、諸行無常、一切空の道理をお説きになりました。」

乙「子どもがかえらぬのは知っていますが、しかしそれだからこそ泣いているのでございませぬ。私どもはもう一生浮かばれないのです。夫ももうこのまま死んでゆくのだと申します。」

甲「奥様、安撫にあきらめよというのではないのです。お坊ちゃんを犬死させてはだめです。ほんとうの親の慈悲について考えていられますか。かわいいかわいひだけで親の慈悲なら、悪党だつて持つていきます。真の慈悲は、両親自身が、明るく伸びてゆくことです。親の運命をたかめることです。親が尊い生活すること自体が、子どもへのいちばん大きな愛であります。これ親鸞聖人が、信仰自体を『末通りたる大慈悲』であると言ひ、『念仏のみぞ末通りたる大慈悲』と叫ばれたゆえんであります。ま

してや幽冥境を異にした今、人間的愛のすべてが手ごとどきません。ただご両親が大きな力にはぐくまれて、尊い明るい生活に出發されることよりほかに、親の慈悲はありません。『自責の念にかられて』と申されますが、悔恨懺悔は尊いことながら責められてばかりいることがけつして道ではありません。それよりいつそう道に信仰に徹底して、自由の天空に放たれて、いきいきした生活に蘇ることこそ、真に自他ともに親子ともに救われる道であります。』

乙「以前は神や仏も漠然とは信じていましたが、子どもが死んでからは神や仏があるものかという気がするのです。』

甲「そうでしょう。多くの人は不幸に出会つたり、正義が通らないように見えたりした時にはすぐその気になります。しかしそこが大きなまちがいです。私はキリスト映画の第七天国を見ました。下水道の掃除夫チコオは粗末な七階の屋根裏の下宿を第七天国と名づけています。彼が暗い下水道から出て道路掃除夫に出世して太陽の光の下で働けるようになった時、彼はそのことの上に神の恵みをたたえます。彼と結ばれたダイアナは、欧州戦乱に出征する間際になつて二人きりで結婚します。やがて長い戦いがおわつて、夫チコオは戦死したという悲報に泣いている時、盲になつたチコオがダイアナの名をよびつつ第七天国にかへつて来ます。二人は抱きあつて泣いて神に感謝します。これが神のお恵みであるとして。なんとという唯物的な救いでしょうか。もし出世ができず、夫が帰つて来なかつた時は、神のみ栄はどうなるのでしょうか。救いとはそうした意味においてあるではありません。抱きあう夫婦の愛が神によつて成立するのではない。物や人を恵まれることの上に神を見るのではない。そうした一切の人間生活は、罪惡そのものとして全否定されるべきものである。多く所有するも罪であれば貧しいのも罪である。子を生むことも夫婦の恋愛も罪である。われらの順境の事実のみを神の恵みと考えるから、子どもが死ねば神も仏もあるものと呪うのです。子どもができたことも死んだことも罪惡である。』

乙「ではどう考えていいのですか。』

甲「み仏の救いは、そうした関係においてはではないのです。私の罪惡生活全体が仏心の廻向によつて救われるのです。火が炭につくように、重い荷物が船に乗せられるように、氷が熱にとけるように、われらの念々刻々の生死の上に不朽の大生命たる信を成就してくださることにあるのです。あるがままの中に、信が動くのです。自業自得によつて生まれ出るわれらの生活さながらの中に如来は生きてまうのです。子どもが死んだということは、仏のなしたまうことではない。

子どもが与えられたことも仏の仕業ではない。

その他、あなたの一生のできごとの一切が……………

それらはすべてあなた自身の業報にすぎない。如来の大願業力はそうした私どもの上に働きたまうのです。信の一念に救われる時、その信力はあなたを浄土まで、仏にまで歩ませ、往生せしめます。明るさと力とが、私どもを微笑の人にし、よろこびの人にし、何ものをも超える力の人とします。……………」